日本公衆衛生学会シンポジウム報告

SUGIYAMA Hiromi
杉山 裕美
放射線影響研究所
JACR 理事

2025 年 11 月 30 日、第 84 回日本公衆衛生学会総会において、JACR から応募したシンポジウム「がん生存率の国際共同研究から考える日本の現状とこれからのがん対策・がん医療」が開催され、「がん生存率の国際共同研究 CONCORD-3 Study の概要と、がん登録データを用いた国際共同研究の今後の課題」をテーマに講演しました。

CONCORD プログラムは、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院（LSHTM）が主導する世界的ながん生存率解析研究であり、各国の住民ベースがん登録データを用いて、がんの純生存率を国・地域別に比較することにより、がん対策の優先課題を明らかにすることを目的としています。第 3 サイクルである CONCORD-3 には、71 か国 322のがん登録が参加し、日本からは 16 府県のがん登録室が協力しました。2000～2014年に診断された成人がん患者および小児がん患者を対象とした 5 年純生存率の解析結果は、2018 年に The Lancet で報告されています 1）。

2023 年 11 月に、国際がん登録協議会（IACR）学術集会がスペイン・グラナダで開催され、COVID-19 パンデミック以降 3 年ぶりの現地開催となりました。本学会において、CONCORD の共同代表研究者である Dr. Coleman および Dr. Allemani と再会し、「日本のがん登録データは品質が高く、より詳細な解析が可能であるが、その解釈には日本のがん登録関係者の協力が不可欠である。」とお話しがありました。日本に持ち帰って検討し、CONCORD-3 に参加した 16 府県のがん登録室、青森県がん登録室、国立がん研究センターが参画し、Japanese CONCORD-3 Working Group を立ち上げました。LSHTM において、日本から CONCORD-3 に提出されたがん登録データを用い、組織型、詳細部位、病期別などのより詳細な解析を実施しました。これらの解析結果を基に、日本の Working Group メンバーが、がん生存率に影響を与える要因について検討を行い、11 の部位別論文およびサマリー論文を執筆しました。これらの論文はピアレビューを経て、Japanese Journal of Clinical Oncology の 増刊号で、The Japanese CONCORD-3 Monograph として刊行される予定です。

日本では多くのがん種において 5 年純生存率が国際的に高い水準にあり、がん種別にみると、食道がんや胃がんでは検診や内視鏡診断技術の普及が、肝臓がんでは画像診断技術の向上や肝炎対策が、生存率向上に寄与している可能性が示唆されました。さらに、卵巣がんでは化学療法の進歩が、肺がんでは画像診断の精度向上による非小細胞肺がんの早期診断が生存率改善に関連していると考えられました。乳がんおよび子宮頸がんでは、検診体制の整備と医療アクセスの良さが早期診断につながり、高い純生存率に寄与していることが示されました。一方で、悪性黒色腫や血液腫瘍、小児脳腫瘍などでは、さらなる要因分析が必要な領域も明らかとなりました。

本講演を通じて、国際共同研究の枠組みを活用し、高品質ながん登録データに基づいてがん生存率を継続的にモニタリングすることが、今後のがん対策およびがん医療の質の向上に不可欠であることを共有しました。

文献
1)Allemani C, et al. Global surveillance of trends in cancer survival: analysis of individual records for 37,513,025 patients diagnosed with one of 18 cancers during 2000-2014 from 322 population-based registries in 71 countries (CONCORD-3). The Lancet,